オーディオ実験室収載

ZANDEN Model 120 の展開(81)
―ベートーヴェンを聴き直す(16)―

１．始めに

前報(80)に引き続き、これまで聴いてきたベートーヴェンの盤を聴き直していきます。

２．Model 120 設定条件の試聴方法

カートリッジは、My Sonic Signature Gold で、接続に関しては、ZANDEN Model 120 の活用(33)同様、下記のとおりとします。すなわち、アンバランス／バランス変換プラグを用いて BACU-2000 経由で Model120 にバランス入力し、アンプは Langivin 6V6pp を使用しています。

今回も P&G のフェーダーに替えてパッシブアテネーターの TruPhase を使用し、RCA 入力→RCA 出力とします。なお、AACU-1000 は TruPhase の入力側と出力側にセットします。

LINN LP-12→(フォノケーブル)→(アンバランス／バランス変換プラグ)→(BACU-2000) →Model120(バランス入力端子→アンバランス出力端子)→(アンバランスケーブル)→(AACU-1000)→TruPhase→(AACU-1000)→(アンバランスケーブル)→Langevin 6V6pp

なお、LINN LP-12 の再構成(22)で報告しましたように LP-12 の電源を交換し、外付けとしています。また、LP-12 の軸受けをカルーセルに更新しています。

音源としては、これまで聴いてきたベートーヴェンの盤から選んでいきます。

今回は、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 61 を選定しました。

PHILIPS X-5632
　ヘンリック・シェリング（ヴァイオリン）
　ベルナルド・ハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウオーケストラ

LONDON SLA-1244
　キョンファ・チョン（ヴァイオリン）
　キリル・コンドラシン指揮ウイーンフィルハーモニー

上記は下記で報告しています。

アナログ再構成後の活用(20)
アナログ再構成後の活用(21)

３．Model 120 設定条件の試聴結果

Model 120 の設定は、ZANDEN 社から提供されたリストを参考にして選択していきます。

PHILIPS X-5632 のシェリング盤は、RIAA、正相、第 4 時定数 High で聴いていきます。

アナログ再構成後の活用(20)でも報告しましたように正統派のベートーヴェンといいう印象です。シェリングは、中庸でゆったりしたテンポ で音楽を構成していきます。これに呼応してハイティンク指揮のアムステルダムコンセルトヘボウも構成のしっかりしたオーソドックスな演奏です。全体として、アナログ再構成後の活用(20)の印象がより鮮明に出てきた感じです。

LONDON SLA-1244 のキョンファ・チョン盤は、DACCA、逆相、第 4 時定数 High で聴いていきます。

この場合もアナログ再構成後の活用(21)の印象がより鮮明に出てきた感じです。すなわち、チョンのヴァイオリンは透明感があり、耽美的、あるいは剃刀のような鋭利な印象が鮮明にでており、感性の鋭さを改めて認識しました。コンドラシン指揮のウイーンフィルは、ウイーンフィルらしい柔らかなハーモニーが透明感の高いチョンのヴァイオリンを浮き出られます。

４．まとめ

これまでの試聴同様、前報(24)で報告しましたように ZANDEN Model 120 の導入などの効果があって、上記の曲の演奏のニュアンスがよく表現できるようになりました。

以上